

真宗保育の願うもの 大谷保育協会社団化の意味

社団法人大谷保育協会

研究部長 祖父江 文宏

真宗保育

(2)

1982. 8. 20

発行 社団法人・大谷保育協会
発行代表者 井伊各量

〒600

京都市下京区烏丸七条上ル
真宗大谷派宗務所
青少年部内(事務局)

TEL 075-371-9181
振替 京都 2-11705

◎ 発達観から

①

私たちは、こどもがこれまででできなかったことができるようになったとき、あるいは、足りなかったものを身につけたとき、そのこどもが発達したのだと考え、その傾向があります。

そして、保育や教育が、その目的のために行われる手段なのだと考えてしまうのです。

このことは人間の一生が、他ならない人間の完成を目標とし、絶対の完成に向かうものだとする人生観と重なりあうことで、保育や教育の型と方法、そして内容を規定していきます。

型とは、完成者より未完成な者に与える、あるいは教えるということですし、方法とは、そのための技術、やり方であり、内容とは、知識の量と技能ということになります。

つまり、絶対の人間完成を目標と定めることで、知識の量と技能で、完成、未完成を未完成な人間が計るという矛盾を犯すことになるのです。

絶対の人間完成があり得ない現実のなかで、この矛盾を解く術はあり得ないはずなのですが、できない者よりもできる者、持たない者よりも持っている者という比較の上での価値観を生み出すことができます。

この価値観でこどもを観る時、私たち保育者は、他と比べて足りないところ、他と比べてできないこと、他と比べていないところを観ることになります。そして、それを補うことが、保育や教育なのだと考えてしまうのです。

保育や教育が、知識や技能の量の教授という一点に集約されていくのは、このためであると考えられます。

しかしこのことは、人間が人間として生きる上に、絶対に欠くことのできない土壌である人間と人間との連なり、社

会、あるいは集団から、ひとりひとりを切り離していく作用をおよぼしていきます。集団や社会は、比較するための他者の集まりにすぎなくなってしまうのです。そして、最も恐ろしいことは、比較の場である集団が、比較の場であることを目標として動き始めるということです。

比較から生み出される価値観が、量と数の論理に置き換えられたとき、集団の利益が最優先することになります。集団の利益を守ることで、個人を切り離し、切り捨てることになっていきます。

個人を切り捨てて守られる集団は、少数の権力者の意志のままに動く集団となり、集団自体の意志を持たなくなり、

この集団自体の意志を持たせないことで、保育者や教育者の、権力者としての(より完成された者の)地位が守られているとしたら、差別を生み出すために、差別者として立つということになりはしないでしょうか。

②

発達とは、学習による質の変化だと考えます。

いま、こどもたちひとりひとりを考えるとき、どのひとりのこどもも、自らをよく変えたいと願っているように思えます。

また、どのこどもひとりにも、よく変わってほしいという願いがかけられているように思います。

そして、どのひとりのことも、自ら
を変える力を持っていると言えます。

しかし、願い、願われ、その力を持っ
てはいても、それが充分に保証されてい
るとは言えないようです。

子どもたちに関わるすべての大人たち
が、自らに問わなければならないのは、
このことです。

学習とは、人間となる学習です。人間
は生まれたから人間なのでありません。
人間として自らを創るものです。人
間は他の人間と連なりのなかで生きる
のですから、自らを創るというのは、他
の人間から創られるということの意味し
ます。保育や教育があるのはこの地点で
しょう。

人間は、自らをよく変えたいと願うこ
とで、人間になりたいと願います。人間
とはなにかを自らに問います。学習と
は、自らに問いかけることから始まり、
考え続けることを要求します。

考えるとは、でき合いの知識や解かっ
たつもりを排して、問いと直面し、自分
自身の言葉を生み出す作業です。こうし
て生み出された言葉が思想です。思想を
生み出したとき、子どもは、自らを変え
ます。

思想は、さらに深く本質に迫ることを
要求します。問いは、問いかけた自らを
つかみ、自らを追いかけます。

発達と呼ばれるものが、不足している
ものをつけ加える、できないことができ

るようになるのだと考えられずに、本質
を変えるのだとするのは、このことによ
ります。

発達を保証するというのは、子どもた
ちと同じように、自らを変える姿勢を、

子どもに関わる保育者たちも持つとい
うことですし、私たち保育者自身が、自
身にかけられている願いを受けとめるこ
とから始まるのです。

子どもたちも、保育者も、同じように、
人間として生きたいと願い、願われてい
るのですから、関わりは連なりとなり共
に育ち合う保育者集団が切り開かれてい
くはずで

③ いま、願い願われているものを、生命
(いのち)という言葉に置き換えるとした
ら、どのひとつの生命も等しく、どのひ
とつの生命も、何よりも重いということ
を認めることが、私たちの保育を成り立
たせる大前提であると言えるでしょう。

だからこそ、ひとりを切り捨てて成り
たつ平等や自由が意味を持たないのです
し、生命の平等と、生きる自由を守るこ
としか、ひとりが育つことにはないのです
し、ひとりが育つことがなくて、集団が
育つことはないのです。

④ 集団が育つ力は、集団を取り込み、考
え、思想を生み出し、集団に行為として
返し、自らを変え、集団から問いを受け
るとするという、個の発達の道すじを力とす

ることによって生まれます。

それは、集団のなかの個にとつては、
自らを集団に向かって開いていくこと、
自らを社会化していくことでしよう。

この、個の社会化が、集団を生かし、
機能させる力となっていくのです。

つまり、ひとりの問題を、みんなの問
題としていくということによってのみ、
集団が生き、機能することにつながるの
です。

そして集団もまた、自らを開いて、社
会化していくことで、生き、機能するの
です。

いま、大谷保育協会が、社団化され、
その願いとして持ち続けているのは、こ
の自らを開き、自らを社会化していく願
いを持ち、持たれているということに他
なりません。

自らを開くということは、差別者とし
て立たないということだし、全ての人と
連なるということだし、自らを批判にさ
らす覚悟を持つということだし、私たち
の保育理念を、全ての人々と共有してい
くことでしよう。

そして、そうならしめる力は、協会々
員の園のひとつひとつが、生命の平等と
自由の理念のもとに、生き、機能してい
くこと以外にはないでしょう。

地域社会に自らを開き、自らを社会化
していく、日々の保育実践こそが、保育
理念の共有こそが、社団化への願いであ
ったのです。

(完)

母と子の対話を求めて



東本願寺絵本シリーズ

6-9才向
しんらんさま
え/やまだみどり
600円

6-9才向
おしゃかさま
え/加藤義明
600円

6-9才向
れんによさま
え/水野二郎
600円

1-5才向
ててて
え/よしもとたかこ
350円

1-5才向
おやすみなさい
え/山田哲也
350円

1-5才向
いきるつてなめに
え/椎野利一
350円

ジャータカ物語 I 小学生向
かんしやく持ちのまきま
え/波辺愛子
580円

ジャータカ物語 II 小学生向
月のウサギ
え/波辺愛子
580円

ジャータカ物語 III 小学生向
音楽師グッティラ
え/波辺愛子
580円

劇画 手塚治虫プロダクション
六角の砦
未定

職場に於て仏道に立つ

大野幼稚園長 藤 兼 晃

一、幼児の姿と保育者の対応

―市民グラウンドへ遊びに出かけた―
砂遊びのグループ。鬼ごっここのグループ。歌遊びのグループなど思い思いに遊んでいる。A・B・Cらは鬼ごっこをしていたのに、桜の樹の下へ行った時、A「ゴレンジャーごっこしようか」と呼びかける。すぐ意見がまとまり、堤より駆け降りること三、四回。

C「ぼく、この樹にのぼれるぞ」と桜の木を見て云ったと思うと、メートル半位の高さが二股になっている所まで登った。
B「もうちょっと登れ！」
Cは必死につかまって、登るより降りるまでの方が時間がかかり、顔色も恐怖と緊張のせいか変わったように見えた。

次にDも登ったが、無言で降りる。A・Bは見ているだけで登ろうとしない。これを近くで見ていたE「D君！ 今度オレなあ」と云って登

る。

E「たすけて！」と大声。

C再び登る。「やったあ！ もうこれいじょうむりだー」

この声を聞きつけ、まわりにいる子どもたちが一人ずつ登った。そのたびに

「ミンミンミンミン」

「おしりふりふり」

「おれはターザンだあ」

「(無言)」

「わたしは、なーにもこわくないわ」と二股の所で一言云って降りてくる。

最後の子どもが登ろうとした時、

園へ帰る時間になり、やめる。

C「おれグラウンドへ又来よう」

D「おれも木のぼりしに来よう。」

お母さんといっしょに」

▲担任教師の感想▼

木登りは腕と足に力をすごく要する。登っている児を見てみると、とても危なっかしい。足を掛ける所、

手の運びなどを考えると同時に、身体を動かさなくてはならないので、それを下で見ている私は、ついお尻を押しあげたくなる。自分の力で登り切った児は喜びをそれぞれの言葉や動作で表現して満足しているが、同時に降りる事を考えると足が一旦止ったかのように見え、恐怖を感じているのがわかる。私も登ってみた。もうちょっと上までと思ってみたが自信がなくなやめた。

降りる時の恐怖感、無事に降りた安堵感・満足感・優越感など交々。「またこよう」と云う言葉で、私と他の児も同じような気持を味わったのではないだろうか？

大野幼稚園教諭

長瀬早代子

二、問題提起

「生きていると云うことはバッターボックスに立つことだ」と或る人に聞かされた。なる程、保育の現場では待たなしたでピッチャーがボールを投げて来る(幼児の言動)。それに待たなしたで対応しなくてはならない。バットを振るか、見送るか、バントをするか。ピッチャーである幼児は集団でいるから大勢が一つの行動をするみたいだけど実際は一人ひとり、一球一球ボールを投げて来

るのだ。しかも変化球が多い。ヒットをいつでも打てる訳がない。うつかりすると見逃しの三振だ。打っても凡ゴロか凡フライでアウトになる。アウトになってベンチへもどる……そこが職員室だ。でもベンチでは監督(園長)や先輩、同輩に非難されたり、慰められたりする。どちらにしても救いはない。ベンチは工夫と努力を組み立てる場だ。これが生きているという事である。

大谷保育協会ではこの数年「できる子・できない子」というテーマで保育の問題を討議して来た。できない子をできるようにしたのは教育技術の成功に違いない。つまり変化球をヒットしたことだ。この成功を目ざして工夫と努力をして来た甲斐があったと云えよう。しかし工夫と努力をしても失敗に終わったということもある。その時、その時にどうする。ピッチャーを非難し、排除し、……つまり落ちこぼれの子とするのか？ それとも自分の至らなさを非難し、いよいよ自信を失うのか。失敗はいけない……だからあの子はいけない……否自分がいけないとするしか道はないか、そんなのは道ではない。困っているだけだ。それなら更に工夫と努力を空しく続けるのか、それ

しかないのか。ここに問題が新しく提起される。「できない子をできるようにすることだけが教育か」という問題である。人間は二元的にものを考える癖をもっている。善と悪・成功と失敗・幸と不幸・得と損・メリットとデメリット・プラスとマイナス等々。このような二元的な考え方のことを仏教では有無の邪見と云う。又生死とも云う。「有無の邪見を破す」とか「生死をへだてる」とか仏教の言葉で云われているのは、先程の「できない子をできるようにすることだけが教育か」と云う問題に通じる。できる子は善(生)できない子は悪(死)。成功は善(有)失敗は悪(無)と二元的にしか考えられない人間の理性の行きづまりを超えようとするのが、問題を持つことに外ならない。答えは簡単に問題を持つことが生きていることなのだから、相手も生きている証拠にそれと同類の問題をもっている(無意識に)に違いないからである。仏道とは、この道を進んで行けば目的を達するといふ道でなく、今を生きる姿勢としてこの問題と取り組む姿勢を持つことである。してみれば成功を喜ぶ心も失敗を嘆く心も邪見から来

ることに気づいて、問題と取り組む力が湧いてくるのである。そして問題は更に次の問題を生み出す。「できない子が隣にいるできる子は、ほんとうにできる子なのか」と。人間の

尊厳性は能力ではない、それなら何なのか?という問題である。そして人間は一人ひとりという形で生きているけれど、本当にひとりなのかという問題である。答えは仏によって

答えられている。只我々がそれを聞くとうとするかどうかにかかっている。真宗保育は保育という場を窓口として保育者が聞法することで、子どもに仏教を教えることではない。

「せんせい、おはよう」——。今朝もまっ黒なはだかんぼさんたちが裸足で園庭を元気にとび回っています。

私たちの園では健康な体、我慢強い心を育てるというねらいで『裸・裸足の教育』を行っています。しかし、昨年までの最大の悩みは、どのクラスにも病気になる子がいる事でした。

冬のある日、一人の男の子に「先生つてずるいな。僕たちは裸になつとるのに先生だけは長袖着とるが」と言われハッとさせられました。それは私自身が今まで裸になりながらない子の原因をその子供や、家庭にばかり解決を求めようとしていたからでした。

裸になろうとしない、問題と想っていた少数の子供達が実は私たち大人の傲慢さをズバリ教

えてくれたのでした。

私たちが毎日保育する上で、自分の気づかないところでこれと同じことを、繰り返しているのではないかと思うのでした。六月に園外保育でカエルとりに行った時、子供と一緒に歩いて素足で歩いてみると不思議な

「命の平等

について」

木田幼稚園教諭

田中 裕子

程、子供の中のつぶやきがきこえてくるような気がしました。

泥んこになりカエル・タニンをとる事の楽しかったこと……子供の目の高さになると今まで見えてこなかった自然の素晴らしさに気づく事ができるのです。子供たちは精一杯、それらの小

動物の命を大切にしようとしませす。

私たち教師は『子供の命』をどれだけ大切にしているのでしょうか。『子供の命』も『大人の命』も同じ人間だから平等、というだけでなく、教師が子供を育て、子供が色々なつぶやきや体で教えてくれ、育ててくれる。

この『育ち合う』というところから平等なのだと思うし、どちらか一方が欠けても育ち合えないというのに、多くは教師の方が、子供の教えてくれる事に気づかないのでしょうか。私は今まで、教師であるから子供より正しいとしたり、教師であるが故に子供に対して理由づけしていた事が沢山あったように思うのです。

保育歴3年

(年長5歳児 39名担当)